カナダ人物記14

不世出のホッケー選手
ウェイン・グレツキー

カナダでアイスホッケーといえば、日本における相撲と高校野球を合わせたほどの人気がある。ホッケー・シーズン、特にナショナル・ホッケー・リーグが始まると、人々は仕事も手につかず、話題といえばもっぱらホッケーのことばかり――という仕儀にあいなる。

The Citizen 提供

その話題の頂点にいるのが、エドモントン・オイラーズのセンター、グレツキー選手だ。何しろ、十一歳のとき八十五試合で三百七十八点をあげ、十七歳でプロに転じて以来、数々の大記録を打ちたて、不可能を可能にしてきた男なのだ。わずか二十三歳ながら、すでに全国的なスーパーヒーロー。それがウェイン・グレツキーである。

オンタリオ州で生まれたグレツキーは、ホッケーと共に育ったといってよい。よちよち歩きのときから、そのころから人気のあったテレビ番組「ホッケー・ナイト・イン・カナダ」を見て、祖母の買ってくれたおもちゃのステッキを手に、彼女をゴールキーパーにして居間で選手のまねをしていた。二歳になると、祖母の家の裏庭で、初めてスケートをはいている。

五歳のとき、ふた回りも年上の子供たちに交じってゲームに参加、初めて得点。それ以来、「グレツキーあるところに勝利あり」といわれるほどで、毎年、勝利選手に選ばれ、相手チームを歯ぎしりさせた。

世界ジュニア選手権でも大活躍、何度も最優秀選手賞を獲得している。

グレツキーが本領を発揮するのは、一九七八年夏、十七歳の若さでワールド・ホッケー協会（WHA）のインディアナポリス・レーサーズと契約を交わし、プロに転向してからのことである。契約期間七年、契約金が推定百七十五万ドルという破格の条件であった。特に、その翌シーズン、エドモントン・オイラーズに移籍されてからのグレツキーの活躍は目覚ましく、それまで毎回最下位だったチームが最前線に躍り出し、その試合は、連日グレツキーの妙技を一目でも見ようというファンで埋まった。

七九年一月二十六日、オイラーズは十八歳の誕生日を迎えたグレツキーと二十一年間という超長期契約を結んだ。契約金は五百万ドルを下らないといわれた。そのシーズン、グレツキーは百十点を稼いで、WHAの年間ルーキー賞を獲得、チームも初めてWHAの最上位に進出した。

その年、オイラーズはナショナル・ホッケー・リーグ（NHL）に加盟した。ビッグ・リーグ入りしたわけである。そしてグレツキーに対するエドモントン市民、いやカナダのすべてのホッケー・ファンの期待もさらに高まった。

グレツキーは、期待を裏切らなかった。NHL新人シーズン最高得点、シーズン最高アシスト（補助プレー）得点、シーズン最高得点、ゲーム当りシーズン最高平均得点および最高平均アシスト得点と、次々記録を書き換えていったのである。例えば、彼が達成した2・05というゲーム当り最高平均得点は、八十回の試合を通じて毎回二点獲得することで、それまで不可能とされていた。どれほどの偉業か、想像できるだろう。NHLの最優秀選手にもたて続けに選ばれ、カナダの年間最優秀スポーツマン（一九八〇、八二年）の栄誉にも輝いた。記録の更新はその後も続いている。

背番号99。グレツキーは子供たちにとっても、またホッケー好きの大人たちにとっても、現代のヒーローだ。

編集後記

●カナダのニューメディアについては、特集やトピックスで何度かご紹介しましたが、今回は主に、ニューメディアがカナダで具体的にどう利用されているか、あるいはどういう利用法が考えられているか、という観点から特集を組んでみました。

●テリドンをはじめ、通信衛星などの活用などを見ますと、カナダはすでにニューメディア時代に突入した、という感じがしますが、いかがでしょうか。

●カナダの医療を取材してこられた日経メディカルの蓮池さんに、見聞記を寄せていただきました。カナダの医療も種々の問題を抱えているようですが、患者中心の考え方は変えて欲しくないものです。

●次号から、カナダ在住のいろいろな方々に「カナダ便り」を書いていただくことになりました。お楽しみに。

●本紙のレイアウトを変えてみました。読みやすい、親しみやすい広報紙にしたい――というのがねらいですが、気に入っていただけたでしょうか。（吉田）

本紙中の意見や見解は、必ずしもカナダ政府またはカナダ大使館の考え方を反映するものではありません。また公式文書の翻訳は仮訳です。転載の際は、できるだけ出典を明らかにして下さい。ご意見やご希望は左記の住所にご連絡下さい。

〒107 東京都港区赤坂七丁目三―三八
カナダ大使館広報部